

指導者の心

会長 池田悦治

「花下自ら蹊を成す」と古人は云っているが、実に花のあるところに人々は集まり、緑蔭に暑さを避ける等ほほ笑ましい景色ではある。われわれは、何の不思議もなしに、春は桜花の下に盃を交わし、秋は林間に紅葉を焚いて一時の憩いを求めているけれども、この桜が誰によって植えられ、この紅葉が何人の手によって育てられて来たかを考えて見ると、今更ながら先人の思慮を感謝せずにはいられない。

今と昔とを問わず、世の指導者達は、いつでも自分達が受けた恩恵を、後進への奉仕につないでいかなければならないが、この頃のように自分の身辺がせわしくなると、折角恵まれた先人の遺産をさえ、何のためらいもなく潰滅してしまうことが多い。

幾万年もの風雪に耐えて、その容姿を全世界に誇った「富士山」が、風化のため毎日毎日崩れていると聞く。そして世の学識諸公は、全知を傾けてその防禦策を練っているようである。勿論「富士」は先人の遺産ではない。その崩れも大自然の必然であって誰の責に帰すべくもない。それでもわれわれは、「富士」の崩れを怖れる。

このようなわれわれの心が、もう少し身近かな生活の中にあつたら、社会はどんなにうおいの多いことだろう。

小さな価値をつくり出すために、平気で大きな価値をぎせいにすることが出来るのは、余りにも狭量に、身近かな価値ばかりを追い、遠い大きな社会の価値を見失うからだろう。

昨今は、社会開発のかけ声が高く、山にしろ川にしろ、一瞬にしてその面影を変えていくが、ときの指導者によって計画されたこれら多くの社会開発事業は、果して国

土を絶対の遺産として未来永遠の後進に引き継ぐのに万全が期せられているだろうか。時には不必要に思える程自然が破かいされているように見える。

はげしい文化の進展によって、日々産み出されていく事物の中に生活しているわれわれが、あるいは疲れ、あるいは病んで、静かな自然を恋うることは極めて一般である。

われわれが、企ててものをつくり出すときに、そしてまたものを破かいしてしまうときに、一番大切なことは、高い視野に立ってそのことの価値を判断することである。何事によらずバランスを失ってはいつしか行き詰ってしまう。

ニュータウンの建設も、工場の誘致も、現代人が挙って行はねばならぬ社会開発であり、四通発達する道路の建設が急務でもある。しかし丘陵山中に完成した新都市から緑が消えたり、誘致して来た工場によって公害を起こしたりしたのでは、あたら望んだはずの文化生活から見離されてしまう。

一度破かいされた山容は、もう永久に復元することができない。人々はあれほど大きなぎせいを払いながらも、登山をやめないのである。人が自然をあこがれる意欲は、文化の進展に連れて強烈になりこそすれ、決して衰えはしない。先人達が桜を植えて後進への贈りものとしてくれたことを思い、社会開発の名に自然の過大な破かいが憤しまれるべきを痛感する。指導者は、咲いた花の下に人を導くのでなく、花の木を植えて、そこえ人々を誘うの心が大切である。

技術にせよ、生産にせよ、あるいは一般に哲学や文学に携わる者すべて社会の指導者にこの「心」が望まれる。